

第1章

概 論

第1節 頭皮針の起源と発展

「治病治人」（病を治すとは人を治すこと）という言葉がある。人は「形」と「神」の2面から成り立ち、人は社会をはじめ、天地・環境・気候などの自然から離れて生きることはできない。それゆえに患者を治療するときは、全体観を重視して、「器」（形体）と「気」の両面から自己治癒力を高めることに着手していかなければならない。このことは朱氏頭皮針の核心であり、また中医学の真髄でもある。

朱氏頭皮針の起源は、針灸医学の起源にさかのぼらなければならない。朱氏頭皮針は、頭部毛髪内にある特定の頭皮下（治療区）に針を透刺し、独自の操作手技を使い、意念で気を導きながら運針し、導引法・呼吸法などを加えて、病氣予防・養生・治療・リハビリなどを行う総合的な療法である。筆者は、マクロ的な特徴のある中医学の理論と、ミクロ的な特徴のある西洋医学の理論を融合して、50年にわたる臨床の場で、弁証と弁病のうえに頭皮針を用い、様々な臨床病証や、危険・救急・重篤な難病の治療を行ってきた。そして万を数えるほどの臨床実践の証明を裏づけにして、現在の朱氏頭皮針を形成してきた。

朱氏頭皮針は、けっして私一個人の力によって生まれたものではない。長期にわたる臨床実践のなかでひと時も気を緩めることなく中医学を追究してきた結果であり、さらに医療関係各界の先輩たち、専門家、同僚、学

4 第1部 総論

生などの熱烈な支持を得て、また多くの患者が朱氏頭皮針の効果を認める土台があって誕生したものである。筆者の50年という臨床経験は、中国5千年の医学の歴史と比べればあまりに短い。膨大なる中国典籍のなかで筆者の得たものは、大海原のなかの1つの泡にしかすぎないであろう。朱氏頭皮針は、古今、中外の先達の知恵の結晶といえよう。筆者の業績は、自らの臨床経験を通して、その理論の精華を実践と結びつけ整理して、東西医学で分断されたものを再び元の姿に戻しただけである。

朱氏頭皮針で使用する治療区の位置は、すべて頭部毛髪内にある。頭部の有髪部位は気血の集まる場所であり、昔から「頭は精明の府となす」といわれている。中医学でも「五臓六腑の精気は皆上りて頭に注ぐ」「頭は諸陽の会となす」「諸経の会」といわれている。したがって、頭皮の特定部位に針を刺すと、気血を動かし、陰陽を調和し、経絡を疏通させ、扶正祛邪の作用をはかることができるのである。

古典には、頭部のツボを用いて、危険・救急・重篤な難病を治療したという記載がある。たとえば「扁鵲は百会穴を用いて^{かく}號の太子の屍厥（仮死状態）を治した」、『玉龍歌』に「脳卒中による失語は最も治療が難しく、髮際^{しけつ}の頂門穴を使うべきである。さらに百会に補瀉を行うと、すぐに蘇生し危険な状態を免れる」「頭痛ならびに眼痛があれば、上星を刺すとよい。頭風、嘔吐、かすみ目があれば、はじめから神庭を取ればよい。偏頭痛は治しにくい、絲竹空に針を施し、皮膚に沿って率谷の方向に透刺し、1本の針で2つの経穴を刺す」「突然の半身不遂には、頂門、百会に刺し、頭痛と蓄膿症には、上星を用いる」、『百症賦』に「額会と玉枕は連なり、頭痛の治療は金針で行う。懸顱、頷厭のあいだは偏頭痛を止め、強間、豊隆でひどい頭痛に効果がある。顔が腫れて浮虚であるなら、水溝、前頂にしか頼れない」などとある。

このように、頭部のツボを使った治療経験は数多く記されており、これは朱氏頭皮針治療区の効能と主治を裏づける根拠ともなっている。それゆえに針灸の起源は、そのまま朱氏頭皮針の起源であるともいえるのである。

ところが、頭皮針が一種の独立した治療法として中国で使用され始めた